

# 庄川町松原遺跡発掘調査中間報告

庄川町教育委員会

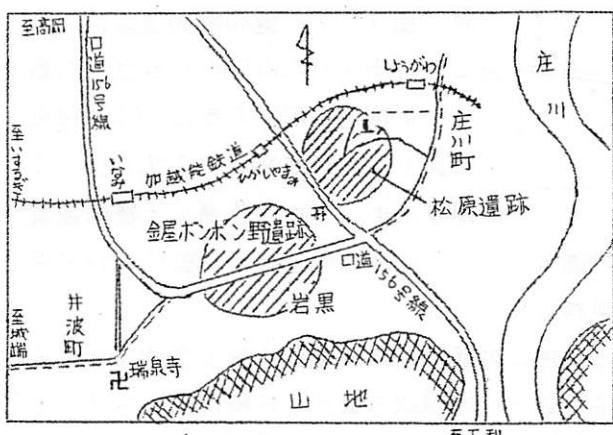


# 遺跡発掘調査中間報告書

庄川町教育委員会

## はじめに

当町松原地内の縄文時代遺跡については、早くから考古学界の一部に知られてはいたものの、地元における調査や研究が業外とおくれ、地元民による組織的、体系的な研究は皆無に等しい状態であった。金屋遺跡、示野遺跡、青島遺跡、松原遺跡などと、それぞれ研究者によってその呼称さえ一定されていないく、あるいは井波町との境界線近くのポンポン野遺跡とも混同されたりして、実際にはその所在さえも厳密には確認されていないような状態であった。(第一図)



第1図

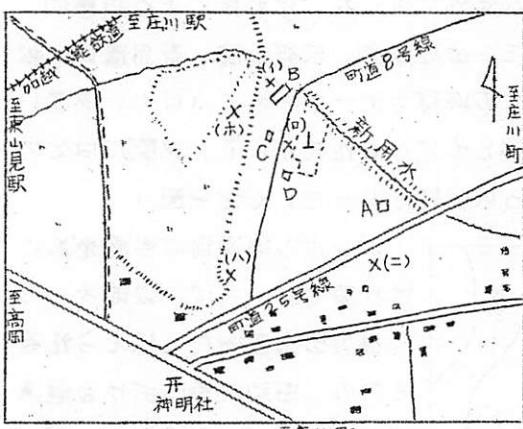
ポンポン野遺跡は岩黒地域におけるそれと共に、以前多くの土器の出土をみたと伝えられるものの、昭和初頭における電源開発によって、金屋反保一帯の開拓作業が着しく進歩し、現在ではほとんど水田化し、出土品の発見はあるか、昔のよすがを偲ぶなどなものもない状態となっている。

松原遺跡も旧庄川の河岸段丘上に成立した遺跡であり、現在は新用水の上に広がる台地上に細長く延びる地域一帯である。この遺跡については大正の初め、加越線敷設工事に際して数多くの土器石器等の出土品を見てその後に於いて学界からも注目されていいたといわれている。ことに戦後になってからは一部の郷土史家好古家、あるいは美術愛好者などによって急激な発掘乱掘、あるいは採集などが行われ、貴重なる文化財がなんら調査、記録などの公開されることなく散失する状態となっていた。なかには完全に近いまでに復元され秘蔵されたり、また学界の研究に多大の貢献をしているものもあるが、その数は極めて少ないと云はねばならないのが現状である。

しかも、土地の開発が急激に進むに従って道路の新設や拡張、あるいは住宅地の造成、木路の改修などによってこの貴重な埋蔵文化財が、これ以上荒廃破壊されるを見るに堪げず、文化財保護の気運の向上と相俟つて当町美術協会、庄川中

学校ならびに町内有識者各位の協力を得、富山県考古学会理事岡崎卯一先生の御指導のもとに、昭和43年初めて本格的に組織化された発掘調査に着手したのである。

### 遺跡の範囲



第2図 至庄川町

当町示野神明宮の国道156号より青島のヤード物横へ抜ける町道25号線が横切る新用水に沿った河岸段丘上すなわち、現在ある青島臺地あたり一帯がその遺跡の包含地と推定される。(第二図)ことに遺物散布濃度は、町道25号線より北方にのびる台地に著しく、発掘地B地区の西北(イ)は当町但田氏の旧屋敷跡と伝えられ、かつては同家においても、豊富な土器が採集されたところである。また墓地と町道8号線との間の南半(ロ)地貢において採集復元されたと伝えられるものも現存している。

またこの台地には発掘地B地区とC地区の西北方に一段低く表土をけずりとられたところがあり(ホ)これは大正の初め、加越線を敷設した際に採土されたところで、このあたりから多くの出土品をみたといわれている。

このほか第2図(ハ)付近は、最近水田化のために土地が低められたところであるが、このあたりの断面にも多くの土器片が含まれており、また町道25号線の南側では(ニ)付近にも遺物を多く包含するところがあるといわれる。

以上の状態からみて、この遺跡は細長く突き出された台地を利用して発達したかなり豊かな部落のあとと看えられる。しかし、詳細についてはさらに今後の発掘調査や分布調査などを本格的に実施して解明すべきであろう。

### 発掘経過

7月17日(水)

岡崎卯一氏、現地調査

発掘調査の方法について検討、協議、具体的日程を決定する。

7月27日(土)

発掘準備打合せ会を町役場で開く。

7月28日(日)

地主の許可を得てA地区の試掘を開始する。このA地は以前に盗掘されていない肅重な箇所であった。三箇所を選んで「っぽ掘り」を行うも出土遺物は皆無。

以前に発掘された形跡のあるところは、やはりそれだけの根柢があつてのこととで遺物包含層としての価値もやはり大きいことを確認させられる。

このA地の発掘調査を中止することに一決し、B地を迷ふ。

7月30日(火)

B地の地主に了解を求める。

この地は、以前より乱掘された形跡もあるが、それだけに遺物包含度が多いと考えられる。

8月1日(木)

作業分担、行程表、調査方法について協議。

よくに記録方法について再検討する。

8月2日(金)

用具の準備、実験。

8月3日(土)

B地区(約170m<sup>2</sup>)の発掘調査。

除草、測量、地割り作業の後、試掘トレーニングを入れ発掘に着手する。

掘り下げは「縦はぎ法」を原則とした。これは堆土しておく土地の余裕がないためのやむを得ない措置であった。

現地は砂質土のため、深く掘り下げるにしたがって土砂崩れのおそれがあり、それに配慮せざるを得ず、作業も予定通りには進捗しなかつた。しかも、包含されている石などの移動状態によってみると、乱掘された後が歴然としており、土層位の判定は極めて困難、かつ不可能視されるくらいであった。しかも、この状態は今次発掘の全行程を通じてつきまとつた最大の難点となり、時には層位の判定を未確認のままで作業を続行しなければならぬこともあった。これは予想されてい

たことでもあったが、現実に当つてみて関係者一同ひどく落胆したことであった。

土器破片を主として遺物數十点採集。

これも前に盗掘にあつてゐるため、ほとんど目ぼしいものもなく、期待していな人々を落胆させた。また、石器は調査の最終日までも殆んど見られなかつた。これは、盗掘によるのか、あるいは当遺跡の特異性となるのか、今後の研究に俟たなくはならない。

8月4日(日)

昨日のB地区発掘部分を掘り下げると共に、トレンチの方向を別の二方向へ延長する。この二箇所は、層序、遺物の埋没状況等を基に判断し、比較的破壊度の低いものと考え床面を下げることにする。

- ① B地区内北東方向、隅の部分は、土器破片多数出土するも、一方は農道に隣接し、さらには、新用水への傾斜地にかゝるため作業不可能と考え、最終的には、生活面と想定される段階で作業を中止する。  
(この部分周辺から用途不明の石が数点出土。或いは石組みの炉の廃絶後、抜きとられた石とも考えられ、住居址並びにその関連箇所の可能性もあつたが、この日、後述するところの炉跡発見をみたため、作業日程の余裕が少くなり、埋め戻すことにする。後日、再調査をするものと考える。)
- ② トレンチをのばした別の一方、B地区内南西方向の一隅から、土器破片多数出土し採集す。しかし、この箇所の一方は農道であり、他方は別の地主の所有地であるため、排土の都合悪く、作業続行不可能。(こゝは、作業進行と共に一部が住居址にかゝることになつたので、後日、掘り下げる。)
- ③ この間、日程に余裕のないため、また、B地区内住居址未検出の時故、C地区の発掘作業を併行した。この地区出土の土器破片とB地区的ものとを比較検討し、遺跡の時代区分を縄文中期の中頃から後半にかゝるものと推定する。なお、復原作業後、土器器形、文様等を検討して正確を期することにする。
- ④ D地区も現地文渉の上、つぼ掘りを行う。

しかししながら、出土の土器破片少なく、基盤までの深度が浅いこと

りかかる。包含層が再堆積のものか、單一の層であるか、複数の層であるか、他地区についても検討を要し、層序記録にたよるも判明しづらい。

⑤ 昨日からトレントを入れていたB地区中央部やや南寄りに、生活面と見しき深さまで掘り下げる。付近から大きな石が数個出土するも、すでに、本発掘以前に移動していたものと識別され、石の位置が横枠されに形跡濃厚なることが感覚的にとらえられる。したがって、生活面が幾層になっているか確認できぬまゝ作業続行。(この点については、最後まで未確認に終る。) ただし、B地区各所における出土土器の埋没深度が、さらに深いことから、生活面が一段下にあるものと推定し、掘り下げる必要性あることに意見一致。

この部分の西側延長、土層観察用のあぜに、炭化物が広がっていることから、このあたりの調査作業を集中的に行うこととする。

(この炭化状箇所の意味については、不明のまゝに終るも、これが手がかりとなって翌日の炉跡の発見へと結びついたものと思う。)

次の諸点について話し合う。

① 破壊箇所の識別に悩み、充分な成果の得られぬことから、調査範囲を広げ過ぎ、若干ながら慎重性を欠いたのではないか。例えば、すでに移動していたとはいえ、石の位置を正確に記録し考察すべきであった。(これは、後で柱穴との関連性を考える際に、住居構造解明のために必要となつた。)

② 排土のための土地が狭い故、炭化状部分一帯の作業が困難であった。翌日は、こゝの床面を下げる。

③ スケッチ、写真撮影はできっていても、土器埋没角度の測定調査で手抜かりがあった。

④ 翌日は、必要な部分だけ、必要な時刻であぜの土を除去すること。

8月5日(月)

前日の作業続行。B地区中央部だけに作業箇所を限定して、床面を下げると共に、必要な部分だけあぜをはずす。土器破片、石器等採集物少なし。

調査予定終了間近かき日暮れ時、深さ約95cmのところより石围み炉の一部を検出。この炉跡を発見した状況について、生徒作文「発掘に

参加して」より、次に記す。

「先生に言われ、土器を取り出す作業に力を注いだ。土器採集後、地盤を少し下げるため、また掘り始めた。一つ、二つ、三つと長い石やシャベルでなでるとぼろぼろともろくこわれる石などが出てきた。

何か意味ありげな石。私たちは、それを残し、他の所を掘っていたら石と石との間に、炭化物。これは!と思、岡崎先生を呼んで見てもうった。先生は「たいしたことなから、でも、まだ掘ってみられ。」この言葉に啓発、私たちは掘っていました。そして、石の並び方が長方形らしい形をしているのに気づき、先生を呼んだ。他の人々もいっせいに集まってきて炉跡ということになった。そして、住居址の柱穴をさがそうと、みんな一生懸命。私は、「もし、住居址が出てこなかつたら、むだ骨を折ってしまう。どうか出てくれるようにならぬくなつたら、」ながら掘り続けた。」

炉跡を半分ほど検出。炉の内部には手をつけず、周辺の炉跡部分を完全に検出。そのため壁面を掘りくずさなければならなくなつた。しかし、そこは掘り出した土を盛った排土箇所故、作業続行不可能。後日さらに、住居址の柱穴部分を検出することにして作業中止。

一日目にトレンチを入れた部分のみ埋め戻し作業を行う。

8月11日(日)

中止していた作業を行う。上屋の構造を想定しながら、どのあたりに柱穴が予想できるかを考え、どのあぜをどの順序ではずすかを検討。住居址の全体をできるだけ検出するためには、掘り上げた盛り土が妨げとなるので、排土の移動作業から始める。しかし、本来、その豊穴と無関係の穴を柱穴と誤認していないか心配しながら作業をすすめる。さらに数個の柱穴を検出。また、農道に近い土壌の意味について、住居址の壁に結びつくものかどうか検討。

遺物を含んでいない地山まで掘り下げ、炭化状の竹製品を検出。遺構土器等との関係を見きわめるべく努力す。年代測定の試料として耐えうるものかどうか、後日、検討することにする。

折り悪しく、午後、雨。作業中止。

8月18日(日)

柱穴の検出作業再開。住居址のかなりの部分を検出。(柱穴の傾斜と

上屋構造の関係について考察。住居址の壁と周溝の掘り込み、堅穴の周辺部から外へかけての柱穴は、最後まで未確認。

8月22日(木)

岡崎先生から連絡をうける。

「(前略)床面は北が高く南が低くなっていますが、それと関連して南側に、溝のような箇所があつたことです。この溝は、やはり、温氣ぬきの一部で外部へ連絡していたのではないでしょうか。但し、外部の地面は床面より、やゝ高いはずですから、それをどう考えたらよいかが問題となります。もう一つは、南側の壁面が完全に出ていなかつたのですが、端近くにあつた石は、やはり、入口と何らかの関連がないかということです。できれば、周辺の壁面を出して写真を撮りたいところだと思います。(中略)

炉跡を中心六個(註、後で三つ追加)の柱穴が発見できましたことは嬉しいことでした。床が砂地のため、石で柱を支えていたのも楽しいことでした。これで当時の住居の様式のひとつが確認できたわけで貴重な資料がふえたことになります。考えてみますと、このように完全に出た縄文の住居址は県内でも少ないと思います。(後略)」

8月26日(月)

一回発掘中間報告書作成。

9月1日(日)

住居址の壁面と周溝の検出にとりかかるも現地の地質条件が砂質土などの土層の面から掘り下げるか検出不可能。堅穴が廃棄されてから埋設するまでの過程についても未確認のまゝ終る。

なお、入口と目される床面近くに、一部、石を敷きつめた箇所検出。但し、平地住居ではないものと考えられる。剝片、石核等出土。

9月15日(日)

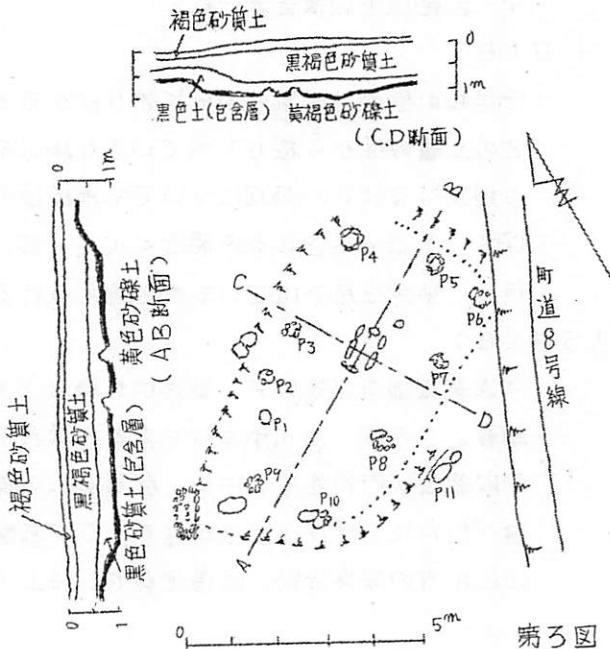
今次発掘調査の最終日。最終的な検出作業。住居址内のレベル高低の測量。この間、庄川中学校で県考古学会例会が開かれ、岡崎先生から中間報告が行われる。午後、会員諸氏の現地観察並びに炉跡内部の調査が行われ、骨片、炭化状態のくろみ等を検出。

住居址内の写真撮影。近傍地盤で、地山の調査を行う。

## 住居址の構造

この台地にはローム層(砂質粘土層)かなく、表土の下の褐色土層につづいて黄色を帯びた砂層となっており、その下に礫層がある。砂層までの厚さは30～50cmで、砂層の上の褐色土層中に黒色の遺物包含層が含まれる。住居址はこの砂層を30～40cm掘り下げた堅穴住居で、長方形に近い平面をもっている。柱穴は床面から20～30cm掘り下げてあり、周囲に小石が埋めてあるものが多い。これは床が砂地で柱をたてても不安定なためであろう。そのためか柱穴の底や柱穴周辺の床面に大きな石を置いている場合多かった。柱穴と思われるものが全部で10個あったが、そのうちP<sub>1</sub>(第3図)は周囲に小石を埋めないで土を塗った形跡があり、P<sub>10</sub>は石が穴につまつたような形であらわれた。P<sub>2</sub>～P<sub>8</sub>の7個はちょうど炉を囲むような状態にあるので、これが主体をなす部分であろう。それに対してP<sub>9</sub>、P<sub>10</sub>の間の巾はやせばまっている。P<sub>11</sub>はかなり大きなビットである。あるいはこの中に斜に立てかけた屋根の柱を置いたかと思ったが、その他周辺にはなお調査が不充分である。このピットの中から多くの石屑が出土した。

炉は長さ約1.00m、中約40cmの長方形で、周囲を石で囲んでいる。炉の内部からは微細な骨粉が土にまじっていることが発見された。周囲の石には焼けたあとがあるが、床には砂質のためか焼土のあとがはつきりしなかつた。



第3図

周囲の壁が垂直ではなく、やや斜に落ちこんでいるのは砂地のためであろう。そのうち西の壁(写真)はことに傾斜がゆるやかで、不整形な面に大きな自然石が数個置かれていた。これは以前の採掘の際に乱されたことも考えられるが、その北方の当時の地表面(砂層の上面)に碎礫を敷いたかと思われる部分があり、出入口であったことも充分に考えられる。

床面では、上の包含層と下の砂層とが明瞭に分離された。これは他の箇所では漸移層となっていて不明瞭であるとの対称的であった。また床面の砂層の上に厚さ1~2cmの固い部分(包含層と同じく黒褐色)があり、注意して掘ることによって上の包含土層とは区別できた。ことにP<sub>1</sub>の周囲に貼りつけたように現われた土はこの部分と連続しているようにみえ、これらによって一度地山を整形してから、更に土を敷いて床面としたことが考えられた。これは地山が砂質であるための特色とも考えられる。

床面は東北から西南に向かって20cmばかり傾斜しており、東北中央の柱穴P<sub>2</sub>の存在と共に入口が反対の西南側にあったことを思わせるものがあった。

## 遺 物

土器はまだ整理されていないが、近接の地から掘り出された但田氏所蔵の土器群とほぼ同じころのものであろう。氏の努力によって復原された20数点の土器の中には、深鉢、台付鉢、浅鉢、皿などが大小さまざまにみられ、井波町の某彫刻家の復原資料とともに貴重な資料をなすものである。これらの土器は小島俊彰氏によれば、後中期半の古府式に属するものであろうとのことである。今後の土器の整理によって、これらの土器群との関連性、その特色が明らかにされることを期待するものである。

石器は磨製石斧も打製石斧も数点ずつで、極めて少なかった。石錘も10点ばかりで余り多いとはいえないかった。石屑はかなり発見されたが石鏃や石ビなどは一貯も発見されなかった。

## その後の経過と現状

### ○遺跡

発掘された住居跡保存のため、除雪期を迎えた昭和43年暮れにいたり、雪に

よる破壊を防ぐため、上屋を設置した。しかし、年が明けて雪どけになると共に雨によつて土砂が流入したり、子供の遊び場となつたり、あるいは心なき見学者の廻入を見るに至り、その跡は著しく荒らされるにいたつた。その上、決定的になつたのは、長い廊地下に埋もれていたこれらの遺跡が、急に風化にさらされるようになつたため、炉跡石などの破壊作用が急速に進みはじめた。これはわれわれが予測していないことでもあり、早急にその应急処置を迫られるにいたつた。

そこで、昭和44年8月に至り、これら損傷箇所の一部を修復し、全域に庄川の異質の砂を運搬して、全面的にこれを埋めたてた。思えばこれらの炉址は5000年の廊地下に眠りつづけていたが、目の目を見たのは約一ヵ年にして再び埋蔵文化財として地下の宝となつたのである。

#### ○ 遺 物

発掘された縄文土器は、庄川中学校に保管しており、その整理は同校地歴クラブの手によって進められている。完全なものは殆んどみられないが、前記岡崎卯一先生の御指導と同校の協力によって、復元可能なものについては、着々とその成果が上がっている。

また、同校地歴クラブによって、実測図の作成、紋様の拓影についても作業が進んでいて、他地域との比定のもとに後日、これを集大成できる機会のあることを望むや切なるものがある。

#### 今後の問題点

本遺跡松原地内は、その遺構並びに出土遺物からみて、発掘調査の現段階においては、縄文時代中期のものと推定されている。しかし詳細に涉っては今後の研究に俟つべき点が多く、次に略記するところは今回の調査によって判明したと考えられるものの一部であるをお断りする。

① 調査の頭初より予想された住居址が、ほぼ完全な形で確認できたこと。今回明らかとなつたB地点住居址に隅丸方形をなす竪穴式住居址（炉と柱穴検出）であり、入口近くと覺しき箇所に敷石部分が検出されている。

これらについては、今後、別の住居址が発見された際、比較検討されることによつて、より正確に意義づけをなされるであろう。なお、当該住居址に関する学術上の位置づけについては、他日、発掘調査報告書において明らかにされるもの

と思う。

- (2) 今回、住居址が確認されたことから、今後に予定される調査で、数多くの住居址が発見される可能性が強く、遺物散布状況調査とあいまって、本遺跡の集落規模・形態がより正確に推測できるようになるものと考える。
- (3) 写真撮影・調査記録等により、出土遺物の状況が明瞭になり、加えて層序調査により、生活面の想定がより確実となつた。したがって、現庄川流路形成以前の時代について十分ならざるも研究の手がかりが得られたものと考える。
- (4) 出土遺物の中心には、可能な範囲で採集された年代測定の試料が採集されているため、従来からの出土品との比較検討により、明らかにされる点が少くないものと考える。

### むすび

B地区の発掘中、南半はすでに土器採集のために堀りかえされたことが知られ、包含土にも攪乱のあとが明らかになつたため一時落胆させられたが、幸い床面がほぼ完全にのこっていたことは喜ばしいことであった。住居址の周壁がほぼ完全にのこっていた例としては、富山県で最初であろう。

この調査で住居址は砂層が一段と深く掘りこまれたところにあり、その付近には濃密な黒色包含層があることが明らかとなつたが、このような場所がB地区では東北端に1ヶ所、発掘された住居址の南方に持して1ヶ所あり、未調査に終つている。

今後数年をかけて遺跡の分布状態を広く調査し、要所要所を発掘調査したいとも考えている。なお発掘した住居址の保存についても熱心に研究中である。

### 追記

本報告書を作成に当り、岡崎卯一氏（大境ガ4号）、稻垣不二男、前田 淳、両氏（砺波地方史研究、ガ2号、ガ6号）の論文を各所に引用させていただいた。